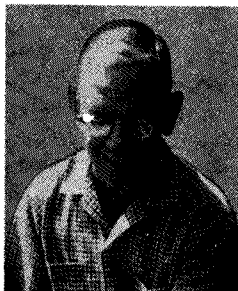


## 第12回熱測定討論会特別講演のため 来日される両博士のプロフィール

### Dr. J. M. Sturtevant



J. M. Sturtevant 博士は、Yale 大学化学教室および生物物理学教室の教授で、現在 68 才、来年停年を迎えられるが、昨年奥さんとヒマラヤ登山をされたほどの若さである。教授は 1927 年に Columbia 大学を卒業され、1931 年に Yale 大学で Ph.D. を得られた。学位論文はグルコースの変旋光熱の測定だったと聞く。それ以来ずっと Yale 大学で研究と教育に励んでおられる。

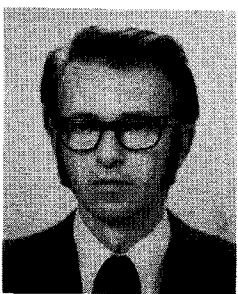
いうまでもなく、教授は熱測定の最高権威の一人であり、特に生化学の領域での最近の活躍は目ざましいものがある。装置を自作されるのがお得意で、熱測定ばかりでなく、高速溶液反応の代表的な測定法であるストップ・フロー装置も自作され、これを駆使しての酵素反応の速度論の研究においても先駆者であり、私にとって忘れ得ない恩師である。

熱測定学界の育ての親であり、現在熱測定に関係している人の半数以上は、何らかの機会に教授の薫陶を受けているといっても過言でないほどだが、大家ぶったところなど微塵もなく、気さくでいつもニコニコしておられる。Sabbatical year には、自分の作った装置をひっさげて、世界中どこでも気軽に出かけて共同研究をされ、装置はそのまま置いてこられるという気前のよさである。

心から研究を愛し、停年退職の間近いこの頃でも、学生たちと一緒に夜おそくまで実験しておられるという。私が教授の研究室に行ってもいない頃、教授が白衣を着て一人で窒素ポンプを運んでおられるのを見て、深い感銘を受けたのを忘れることができない。私が学者としても人間としても心から敬愛する先生である。

---

### Dr. E. M. Barrall II



1970 年秋、筆者は米国滞在最終日にカリフォルニア州 San Jose の IBM 研究所に、Barrall 博士を訪問した。バスターミナルで初対面の筆者を待っていた Barrall 博士が、30 代の小柄な人であるので意外な印象をもったことを覚えている。一昨年の熱測定討論会に来日した Wendlandt 教授から、He is a brilliant man. と聞き、漠然と大柄なきわめて快活な人を想像していたのだが、むしろ brilliantなのは、頭の速い回転とひらめきを指しているのに後で気付いた。

Edward Martin Barrall 博士は、1934 年 12 月 8 日ケンタッキー州 Louisville に生れ、1955 年に University of Louisville を卒業し、1957 年分析化学で修士課程を修了後、1961 年 MIT で Differential Thermal Analysis of Organic Compounds によって Ph. D. を得ている。現在は、上記の IBM の材料研究所で、高分子や液晶の熱的性質の研究を初め、高分子の GPC のような characterization の仕事にも関与している。この間 University of Connecticut で 1 年間教授として学生の指導にあたったほか、Stanford や Berkeley でも講義を受け持っている。きわめて精力的に仕事をし、多数の論文を書いていることでも有名であるが、筆者の質問に対して amusing myself のために書いているのだと答え、笑っていた。学会関係でも、1974 年の NATAS 会長、Thermal Analysis Abstracts 誌の北米編集者、Thermochimica Acta 誌の編集委員など多彩な活躍ぶりである。

今回の来日は、私的な用件のためであるが、熱測定討論会にあわせて日程を変えていただいた。同名の御子息 Ted 君を伴って来日することであるが、家庭での Barrall 博士は、厳格な父であると同時に細かい心遣いをみせていた。Barrall 博士の言葉のわかり易さは、このような心遣いと頭の回転の速さによるのであろう。討論会における明解な講演と多数の研究者との交流を期待したい。